⑧ 八兵衛ギツネ

日高郡印南町の県道わきに、「キツネの顔あらい水」という小さな野井戸がありました。

今では、ほそうされたために、見えませんが、それまでは、つめたい水が、いつもこんこんとわき出していたのです。その小さな井戸に、こんな言い伝えがありました。

むかし、このあたりに、八兵衛というおすギツネがいました。白と茶色のまんだらもようの大きなキツネでした。

安兵衛、由兵衛、兼助という三匹の子分をつれて、いたずらのしほうだいでした。

ちょうど食べごろになったスイカを、あっちの畑でも、こっちの畑でも、ぽんぽんわったり、夜歩きする人のちょうちんを吹き消したりしました。

ある日、茂一という人が、しばかりをして、山にかまをわすれてきました。

「新しいかまだ。朝になったら、さっそく取りに行ってこよう。」

ところが、あくる日、茂一がおもてに出ると、家の前にかまがおかれていました。よくよく見ると、きのう山にわすれてきたかまです。ところが、その新しいかまの刃が、ぼろぼろにおられていたのでした。

村の人たちは、もうがまんができなくなって、八兵衛が顔をあらう水たまりをうずめてしまいました。

「よくも、おれさまのだいじな井戸をうめてくれたな。」

と、八兵衛は、かんかんにいかりました。

そして、前よりもいっそういたずらをするようになりました。

村の人たちも負けられません。こんどは、山がりをすることになりました。

さすがの八兵衛も犬にはかなわない。においをかぎ出されて、追い出されたところを、猟師たちが待ちかまえていて、ガンガンと鉄ぽうをうちました。しかし、一つもあたりません。

「ちくしょう。またにげられたか。」

というわけで、なかなか退治(たいじ)することができなかったのです。

ところが、八兵衛は、

「おれさまの命(いのち)をねらうとは、じつにけしからん。」

と、いっそうらんぼうになり、それまでいたずらをしなかった女の人や子どもにまで、八つあたりをしはじめました。

村の人たちは、すっかりこまりはてましたが、どうすることもできず、ついに山がりをあきらめ、水たまりをもとのようにしました。

すると、八兵衛のらんぼうがやみました。

どんな天気のよい日でも、野井戸のあったところは、今もアスファルトがしめっています。